様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１１９６

研究課題名（和文）対話を活性化する比較鑑賞題材の開発と授業モデルの確立

研究課題名（英文）Development of Comparative method for rich Opinion and Establishment of Teaching Model

研究代表者
泉谷　淑夫（IZUMIYA, YOSHIO）

岡山大学・教育学研究科・教授

研究者番号：３０２６３５５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：１.比較鑑賞のための図版資料としての大判複製画の収集を行い、活用した。２.教育学部の必修科目である『美術鑑賞』と一般教育科目である『美術鑑賞入門』とにおいて、様々な比較鑑賞授業の実践を試み、一応の成果を上げた。３.論文『比較鑑賞で読み解くフェルメールの造形性』を執筆し、岡山大学大学院教育学研究科研究集録第158号に投稿した。４.中学校向けに改定した授業モデルを使って、３人の現場の先生方に研究授業を行ってもらい、撮影してＤＶＤに記録した。５.論文『中学校美術科の鑑賞教育における比較鑑賞題材の可能性』を執筆し、岡山大学大学院教育学研究科研究集録第162号に投稿した。

研究成果の概要（英文）：1.Collection and Using of Large Reproductions for Comparative Art Appreciation 2.Teaching Practice in 『Art Appreciation』and 『Introduction to Art Appreciation』3.Present a Paper,『Appreciation Method of VERMEER‘S Paintings』, Bulletin of Graduate School of Education Okayama University,No.158,2015 4.Three Times Teaching Practice in Junior High School and Recording on DVD 5.Present a Paper,『Possibility and Problem of Comparative Appreciation Method in Junior High School Art Education』, Bulletin of Graduate School of Education Okayama University, No.162,2016

研究分野：絵画　鑑賞教育

キーワード：比較鑑賞　造形性　類似作　対照作

１．研究開始当初の背景

アメリア・アレナスの登場依頼、わが国の中学校美術鑑賞教育の現場においても、近年対話型鑑賞の方法が少しずつ広がりを見せている。その一方で、対話形式を用いても必ずしも対話が充実していかない、対話の着地点がみえてこない、鑑賞を通して生徒にどんな力を身につけさせればよいのかがわからない、などといった疑問や不満も出るようになり、対話型鑑賞の課題も見えてきた。

そこで筆者が長年研究してきた比較鑑賞の方法を積極的に対話型鑑賞に用いることで、中学校の美術鑑賞における対話を活性化することができるのではないかと考えた。その背景に、筆者の教員免許状更新講習での実践があった。その場で初めて比較鑑賞と対話形式を組み合わせて講習を実施したところ、予想以上に活発な対話（意見交換）を受講生の間に生み出すことができたのである。

これをきっかけに「比較鑑賞が対話を活性化する」という筆者なりの仮説が生まれたのである。そこで次は、中学校用の題材作りと、中学校用の授業モデルの開発に取り組むこととなった。もちろんその前に、大学での授業実践が必要となるため、資料収集や作品研究を積み重ね、比較鑑賞として興味深い事例をたくさん開発しなければならない。その上で、発達段階的に中学生向きと思われる内容や授業展開、そして授業目標を立てていくこととなった。

筆者の研究する比較鑑賞の特色は、対話の焦点を作品の「造形性」に求めているところにある。つまり知識として与えられるものではなく、目の前の作品を比較することで誰もが見て考えられる内容（形、色、構図、画肌など）を取り上げるのである。これだと何の予備知識も要らず、目の前の作品から誰もが同じスタート地点に立てるのである。そしてそこで得た内容が貴重な知識として、その後の鑑賞活動に生かされるようなものを、極力追求していくのである。

課題のひとつである「鑑賞を通して生徒にどんな力を身につけさせればよいのか」という疑問に対しても、「造形性」に着目させることで、自然と目指すべき方向が見えてくると考えた。これは美術の本質に関わる極めて重要な方向性であると考える。「造形性」を最重要のキーワードとすることで、鑑賞活動は制作活動にも結びつく体験となり、表現活動全般が活気を帯びて進展していくというのも、研究開始時点での筆者の仮説でもあり、期待でもあった。

２．研究の目的

筆者が長年研究してきた比較鑑賞の方法を活用して、意見が出にくいと言われている中学生が、対話型鑑賞に積極的に参加できるような比較鑑賞題材と授業モデルを開発することが、第一段階の研究目的である。この目的達成のために、以前にも増して美術作品の研究を造形的な視点から深める必要性を感じた。

次に、開発した題材と授業モデルを、中学校の現場での実践に載せることで、仮説の検証を試みることが第二段階の研究目的である。この目的達成のためには、研究期間の前半で第一の目的をかなり達成しておく必要がある。と同時に、自身のネットワークを活用して、有能な授業実践者を確保しておくことも欠かせない。

以上の主要目的を達成するための条件整備として、大判複製画などの図版資料やパワーポイントによるデータ作成の充実も、今回の研究目的に入る。

３．研究の方法

一つ目の研究目的である「題材開発」のためには、前段階として、まず比較鑑賞に適した作品をできるだけ多く見つけ、その組み合わせを考えなければならない。そして選ばれた作品のできるだけよい状態の図版やデータを収集・確保しなければならない。そこでこれは従来からも継続的に取り組んできたことではあるが、「有効な図版資料の収集」を研究方法の最初に位置付けた。筆者は自身の実践においてパワーポイントで作成したスライド映像と印刷物である複製画とを組み合わせて活用しているが、そうすることで授業展開に変化を持たせ、単調にならないようにしているのである。今回の研究でもそのあたりは重視して、大判の複製画も可能な限り収集し、複製画による授業展開もいくつか開発するように努力した。

「題材開発」に続く「授業モデルの開発」では、筆者の大学での授業実践が欠かせない。筆者の仮説が「机上のプラン」とならないようにするためにも、まず大学の授業で実践してみて、候補題材が対話の活性化に結びつくのかどうかを自らの手で検証してみるのである。幸い筆者には教育学部の専門科目として『美術鑑賞』という必修科目が、また一般教育科目として『美術鑑賞入門』という選択必修科目があるので、これらを活用することにした。どちらも継続的な実践が可能であるため、研究を深めるためには欠かせない方法である。その中から中学校向きの題材を精選していくことが、確実な方法と考えた。

二つ目の「仮説の検証」のためには、筆者が開発した比較鑑賞題材を、中学校の現場で授業実践する必要がある。岡山大学の教育学部及び大学院教育学研究科で直接指導し、鑑賞教育に対して関心の高い卒業生３名に、実践授業を依頼することとした。３名の教職経験は３～５年であり、これく

らいの経験値の教員に実践できる授業ならば「授業モデル」となり得ると考えたのである。それらの授業を撮影して、「仮説の検証」を行い、最終的に本研究の可能性と課題を明らかにしていこうと考えた。

４．研究成果

今回の研究で得た成果を、以下の（１）から（６）に整理して報告したい。

（１） 鑑賞授業のための図版資料の充実

鑑賞の授業では、何らかの方法で作品提示をしていかなければならない。今日の主流はパワーポイントで作成したデータをスライドショーで投影する方法であるが、補助的にカラーコピー図版を用いることがある。これらに加え、筆者は大判複製画を活用している。大判複製画の利点は、教室を暗くしないで済むため、受講者の反応が見て取りやすいこと、良質の印刷ならば、近くに寄って細部を確認することができることである。ただし、大判複製画は国内ではほとんど販売されておらず、入手が困難な点がネックであった。かつて筆者は海外旅行のたびに、欧米の美術館や街中のショップで大判複製画を求め、苦労して持ち帰った経験があるが、今回はネットのサイトで大判複製画を通信販売しているところが見つかったため、そこから必要な図版を数多く入手できたことは、大きな収穫である。それらの複製画は 2014 年～2016 年にかけて筆者の『美術鑑賞』の授業ですでに活用され、徐々に成果を上げている。

（２） 鑑賞授業のためのデータの充実

今回、比較鑑賞に特化して、集中的に研究に取り組むことができたので、比較鑑賞題材のパワーポイントによるデータ化が、かなり進んだことも、大きな収穫である。比較鑑賞にも様々なタイプがあるため、開発した比較鑑賞題材をデータ化し、それらを筆者の授業科目である『美術鑑賞』や『美術鑑賞入門』の場で実際に使用することで、題材の妥当性を確かめることができ、使用後さらにブラッシュアップすることでデータの信頼性を高めることもできた。その中から、対話の活性化につながると思われるものを、教員免許状更新講習や放送大学での面接授業の場で実践してみることで、より客観的な反応を確かめ、その題材の可能性と課題を探ることができたことは、大きな成果である。

（３） 比較鑑賞研究の深化

鑑賞授業のための図版収集やデータ作成は、比較鑑賞研究を深める上で、大いに役立った。図版収集からいくつもの比較鑑賞のアイディアが浮かんだり、データ作りの過程で、新しい比較鑑賞のプランを思いついたりということが多々あった。たとえば、ラファエロの「似た構図の聖母子画から特色を見出す比較鑑賞」やカラヴァッジョ、ルーベンス、ラ・トゥールなどのバロック期の巨匠たちの「同一主題の宗教画における類似作の比較鑑賞」、マグリットの「同一発想に基づく、構図やモチーフの異なる作品同士の比較鑑賞」、ロックウェルのイラストレーションの「元写真と完成作の比較鑑賞」、リクテンスタインのポップアートにおける、「コミックスの原画と完成作の比較鑑賞」などが挙げられる。これらはいずれも、筆者の独自性が発揮されたオリジナルせいの高い題材例であると自負している。このように、筆者の比較鑑賞への造詣が深まったことは、今後の研究のためには大きな成果である。

（４）中学校向けの比較鑑賞題材の開発

大学の授業や教員免許状更新講習、放送大学での面接授業の場で実践し成功した題材の中から、中学校向きの題材を絞り込み、いくつかの題材を開発できたことは貴重な収穫である。筆者は長年現場の中学校に勤務していた経験があるが、すでに大学での教職経験がその期間を超えているため、とかく研究内容が専門的になりがちである。このため筆者が中学校向きと思っている内容でも、現場の中学校や現代の中学生の実態と乖離してしまうケースもある。このような理由から、この作業は思っていた以上に難しかったというのが、本当のところである。最終的に候補題材の中から、ロックウェル、リクテンスタイン、マグリットの作品を取り上げた比較鑑賞題材を、現場に提示し、実践する運びとなったが、予定ではもっと多くの題材提示ができるつもりだったので、残念なところではある。とはいえ、この三つの題材は中学校での鑑賞教育の進展に、十分に寄与できる可能性を持っているので、一応の成果として捉えている。

（５）実践授業から得た可能性と課題

3 回にわたる実践授業をすべて参観するとともに DVD に録画し、事後に授業者３人とともに分析を行った。その作業から、「比較鑑賞が対話を活性化する」という筆者の仮説は、一応立証できたように思われる。その理由は３つのクラスのうち２クラスで、生徒の発言がかなり活発に交わされたからである。またその発言もこちらが意図した「作品の造形性」に関したものが多かった。この２クラスに共通するのは、いつもの班活動を鑑賞の授業でも取り入れていたことで、班内での意見交換をした後に、個人の意見発表を促していた点である。一方、意見があまり出なかった１クラスの場合は、通常の授業形態ではなく、画像を映し出すテレビモニターを扇状に囲み、生徒が前を向く形態であったため、個人の意見を発表しづらかったようである。このように対話の活性化のためには、比較鑑賞の方法とともに普段の班活動などを活用する必要があることが判明し、今後の課題となった。また中学校向けの題材化が不十分で

あることも、これらの実践を通してわかったことである。中学生の段階で、どの程度の知識があり、どの程度の造形的理解が可能なのかを、もっと調査する必要を感じた。これは長年、大学生や社会人を対象に鑑賞教育を行ってきたために、かつては掴んでいた「中学生の実態」に、明らかに疎くなっている証拠である。今回の授業実践を通して、筆者のこのような実態が明らかになったことが、ある意味でもっとも大きな収穫であったのかもしれない。真摯に反省し、今後の研究に生かして生きたいと思う。

（６）社会に向けての研究成果の発信

以上の成果のうち、実践授業に関する部分は、研究期間内には現場に届けることはできなかったので、今後、その手立てを慎重に検討していきたい。

実践授業の報告としては、2016 年７月に発行予定の岡山大学大学院教育学研究科研究集録に、『中学校美術科の鑑賞教育における比較鑑賞題材の可能性と課題』を投稿中である。その他、本研究に関する論文としては 2015 年に岡山大学大学院教育学研究科研究集録に掲載された『比較鑑賞で読み解くフェルメールの造形性』がある。

論文以外の社会へ向けての発信としては、筆者の提案する「比較鑑賞の有効性」について、2013 年 8 月と 2014 年 8 月に、それぞれ長崎県と茨城県の現場の中学校美術科教員を対象とした夏季研修会で行った講演会が、大きな成果と言える。ともに演題は『鑑賞教育の必要性と比較鑑賞の有効性』で、長崎県でも茨城県でも 130～150 名ほどの参加者に向けて、比較鑑賞研究の成果を伝えることができた。参加者の反応はおおむね良好で、質疑応答も充実していた。また対象が一般となるが、2014 年３月に岡山市のシティミュージアムで開催された『知られざるミュシャ展』の講演会で、『ミュシャが長く愛される理由』と題して、比較鑑賞をベースにしたクイズ「ミュシャを探せ!」や日本の仏像との比較鑑賞を試みた。この講演は参加者から好評をいただいただけでなく、100 名の入場定員を大きく超えてしまったため、後日２度目の講演会を開催したほどである。

また規模的には小さいものの、2014 年８月に岡山県教育センターの中・高等学校美術研修講座で行った『比較鑑賞で楽しく読み解く名画や絵本の世界』や、同じく 2014 年８月に板橋区立中学校教育研究会・美術部会夏季研修会で行った『鑑賞教育のあり方への提言－見ること、考えることを大切にする－』があり、現場の教員に比較鑑賞の有効性を体験してもらいながら、実感してもらえたことは、貴重な成果と言える。こちらも一般対象としては、2015 年の 11 月に３週にわたり、計 8 回行った放送大学での面接授業『美術散歩－名画から絵本まで－』がある。この講座でも、比較鑑賞を活用した対話型の意見交換を試み、大変盛り上がった。これらの成果の発信で得たものとして、比較鑑賞という方法が、年齢を問わず、多くの人に楽しく、そして興味深く美術を学んでもらうためにかなり有効であることを実感できたことが挙げられる。「難しく感じられることを分かりやすく伝える手段」として、今後も比較鑑賞の研究を深めていきたいと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① <u>泉谷淑夫</u>、中学校美術科の鑑賞教育における比較鑑賞題材の可能性と課題、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無し、第 162 号、2016、本文 18 ページ（掲載予定）

② <u>泉谷淑夫</u>、比較鑑賞で読み解くフェルメールの造形性、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無し、第 158 号、2015、119－136

〔学会発表〕（計２件）

① 泉谷淑夫、『鑑賞教育の必要性と比較鑑賞の有効性』、茨城県近代美術館・美術館セミナー講演会（対象：中・高等学校美術科教員)、茨城県近代美術館、2014.8.12

② 泉谷淑夫、『鑑賞教育の必要性と比較鑑賞の有効性』、長崎県美術館鑑賞教育研修会講演会(対象：中・高等学校美術科教員)、長崎県美術館、2013.8.6

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岡山大学・教育学研究科・教授
泉谷淑夫（IZUMIYA Yoshio）

研究者番号：30263552

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：